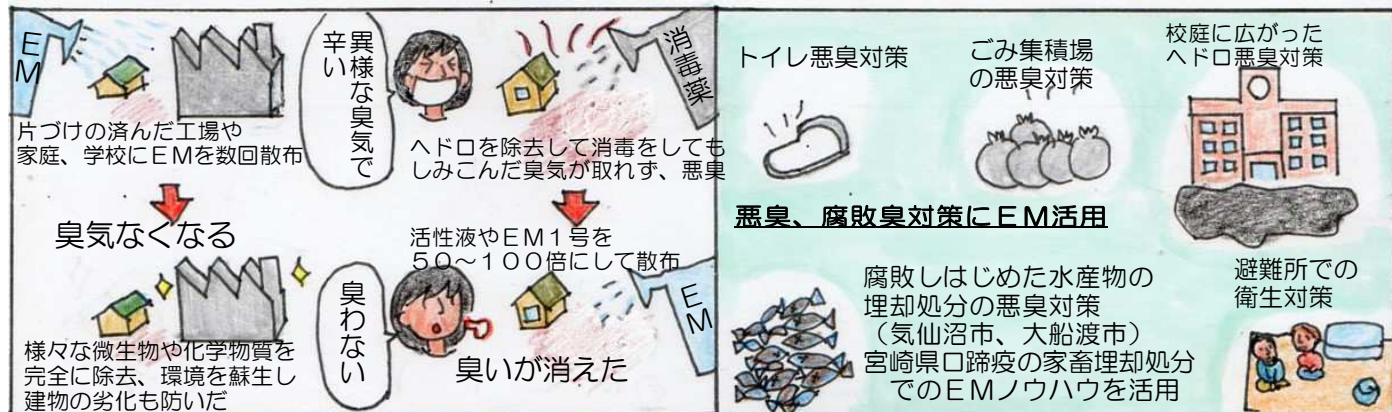


東日本大震災の復興にEMが大活躍

2011年3月11日、東日本大震災がありました。地震と津波、そして、福島第一原子力発電所の事故により未曾有の大惨事になりました。この時、EMは様々な場所で活用され、効果をあらわしました。

・悪臭、腐敗臭、ヘドロの汚泥対策 (2011,4,14比嘉博士DNDレポートより要約)



4月には既に、青森八戸市、岩手県全域、宮城県全域、福島に、大量のEMが届けられ、町の避難所全てに活用 (岩手県山田町)、行政とタイアップして本格的に活用 (岩手県宮古市)、等々被災地で様々な用途で活用されました。

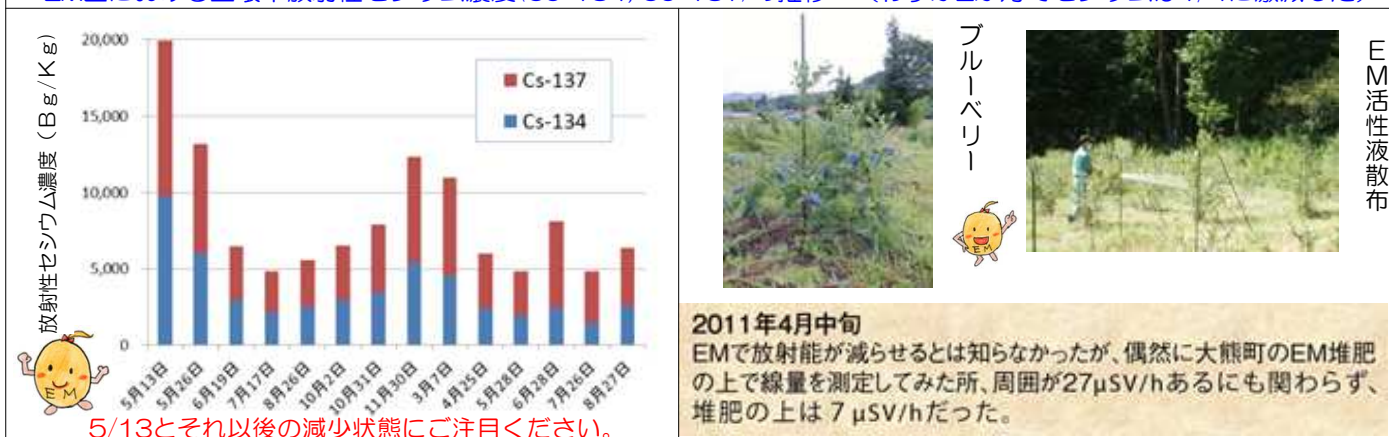
・放射能対策 (土壌の除染)

1. 計画的避難区域となった飯館村のブルーベリー園(24a)で、公式に関係者の了解の下に、EMによる放射能対策の試験を行いました。平成23年5月より福島県飯館村の果樹農家の理解と協力を得て、EMを活用した農地の放射能汚染の低減化を目的とした実証試験を開始しました。
 2. 【試験方法】約20aのブルーベリー農園内に、EM活性液を散布する「EM区」を設定し、EM区に隣接する場所に何も散布しない「対照区」を設定し試験を実施しました。EM区では、光合成細菌(EM3号)を添加したEM活性液を週に2回、10a当たり100Lを散布しました。平成23年7月下旬以降は、散布を週に1回に変更し、平成24年4月以降は10a当たりEM活性液500Lを2週間毎に1回散布しました。
 3. EM区では試験開始直後の土壌の放射性セシウム濃度は1kg当たり約20,000Bq (ベクレル) あったが、2ヶ月目の7月には約5,000Bq/kgまで大幅に減少しました。すなわち、放射性セシウム濃度はEM散布開始後2か月間で約15,000Bq/kg(約75%)低下しました。(下図)
- その後、EM区は放射性セシウム濃度は冬に一旦上昇したが、4月からは再び減少し約5,000~6,000Bq/kg付近で推移しています。

EM区に隣接しない県道を挟んだ対面に位置するブルーベリー圃場の土壌を調査したところ、土壌の放射性セシウム濃度は約15,000Bq/kgと依然として高い数値が計測されました。(調査日：平成24年9月6日)

この測定結果は、放射性セシウムは土壌中の粘土粒子等と強く結合し耕起していない圃場の場合には表面から2.5cmの深さに95%が留まるという農林水産省の報告とも合致していました。しかしながら、自然に土壌中の放射性セシウムが2ヶ月間で75%近く減少することは考え難いことから、EMの働きにより土壌中の放射性セシウムが低減したと考えられます。

EM区における土壌中放射性セシウム濃度(Cs-134, Cs-137)の推移 (わずか2か月でセシウムは1/4に激減した)



・放射能対策 (外部被ばく、内部被ばく)

かつて比嘉先生が指導するEM研究機構がチェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシで実験をし、被ばく者に「EM・X(旧タイプ)」を一日30~50cc飲用させると、30日以内で、外部被ばくだけではなく、体内に放射能が入った内部被ばくも正常になりました。(今はEM-XGOLDとしてよりパワーアップした製品になっている)

チェルノブイリ原発事故の被災国となったベラルーシの国立放射線生物学研究所は「EM1号やEMX GOLDは放射線による酸化ストレスを著しく軽減すると同時に、放射線または日常的なストレスによる体内で発生する毒物に対し、極めて強い消却排除作用を持っていて、放射線被曝対策の根本的な解決策になり得るものである。」と発表。

・放射能対策 (放射能を取り込まないEM野菜)

10年ほどEM栽培している農家では、畑の放射性セシウムが2000Bq/kg以上あるのに、その作物から放射性物質が「不検出」という現象が起きています。



広島、長崎の原爆の後50年はパンパン草も生えないと言われたのに、1年後に生えました。原爆後遺症を発酵食品で乗り越えた方もいます。当時の日本に根付いていた味噌、糠漬け、梅干し、肥溜め農業(発酵微生物農法)の発酵文化の風土を思い出してください。